

鍋島家の服飾遺品：栄子夫人所用の夜会服

著者	大網 美代子, 土居 千夏
雑誌名	大妻女子大学家政系研究紀要
巻	56
ページ	11-22
発行年	2020-03-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00007064/



原著論文

鍋島家の服飾遺品 ― 栄子夫人所用の夜会服 ―

大網美代子・土居千夏
大妻女子大学家政学部被服学科

The Costume Heirlooms of the Nabeshima Family ― Nagako of Evening Dress ―

Miyoko Oami and Chinatsu Doi

Key Words: 鍋島栄子 (Nagako Nabeshima), 明治期 (Meiji period), 洋装 (Western clothing),
バサスル・ドレス (Bustle Dress)

要旨

鍋島報効会蔵鍋島栄子夫人所用の夜会服の修復のため調査の中から構成・意匠面の特徴を明らかにし、昭和 54 年から 60 年にかけて調査を行った服飾遺品と比較を行い、製作年、着装、様式などを考察した。

ドレスの素材や付属品は他の服飾遺品と同様に、舶来品を用いており、バサスル・スタイルのシルエットを形成するため、その構造と縫製がなされていたが、スカートの後腰のボリュームを抑え、Sカーブラインのシルエットに移行していく様子がうかがえた。また、デザインと素材の扱い、合理的なパターンの配置などに工夫がみられた。ドレスの製作年は寸法や様式などから明治 20 年代後半から 30 年代にかけて製作されたものと推定ができる。さらに、ドレスの欠損の原因について、仮説を立て裏づけ資料の調査を行った結果、栄子夫人の着装写真が掲載されていた女学講義を発見し、大日本女学会に辿りついた。創立時から副総裁を勤められ、近代女子教育において重要な役割を担っていたことが分かった。

1. はじめに

侯爵鍋島家の服飾遺品調査・研究は昭和 54 年 (1974 年) から昭和 60 年 (1985 年) にかけて数回にわたり、佐賀の財団法人鍋島報効会、佐賀県立博物館で行われた。その際、鹿鳴館時代の夜会服の修

復を行っている。服飾遺品の調査・研究では、実物から学ぶこと、記録の大切さ、時代との照合による裏づけなどを行い、現在の研究の礎になっている。平成 29、30 年度にわたり鍋島報効会蔵鍋島栄子夫人着用の鹿鳴館時代の夜会服の修復を大妻女子大学本研究室が行った。

ドレスは「鹿鳴館の華」と謳われ明治の社交界をリードした鍋島栄子 (11 代鍋島直太公夫人) の夜会服である。鍋島家に出仕していた岡部トミが栄子



図 1 栄子夫人所用の夜会服

夫人より拝領し、そのご子孫から鍋島報効会に寄贈されたものである (図 1)。

本稿ではドレスの調査結果の中から、特に、素材・加飾・縫製技術など、構成・意匠面から特徴を明らかにする。また、ドレスの製作年代などを他の服飾遺品の寸法、構成・縫製、様式、会符の記録・当時の写真・新聞・雑誌などの裏付け資料と共に考察をする。

2. 侯爵鍋島家の服飾遺品調査

昭和 54 年 (1974)～昭和 60 年 (1985)
鍋島栄子 (ながこ) (1855-1941)
安政 2 年 (1855) 広橋胤保五女として生まれる
明治 14 年 (1881) 4 月ローマ公使館にて結婚式
明治 15 年 (1882) 2 月ローマ公使官邸にて伊都子妃を出産、のちの梨本宮妃殿下
3 月ローマ公使館にて大夜会催す
帰国に際し伊国皇帝に謁見
鹿鳴館では、夫妻で活躍
明治 20 年 (1887) 日本赤十字篤志看護婦人会結成
明治 34 年 (1901)～昭和 10 年 (1935) まで
日本赤十字篤志看護婦人会会長に
就任、大日本女学会副総裁、慈恵
病院幹事など歴任

昭和 16 年 (1941) 1 月 3 日没す 87 歳

侯爵鍋島家の服飾遺品調査・研究 (表 1)

鍋島家の服飾遺品は鹿鳴館時代の夜会服、仮装舞踏服 (ファンシーボール)、大礼服用トレーン、ヘッド・ドレス、職業服、スポーツ服、ディ・ドレスと様々な服種を網羅した明治時代の洋装導入期の貴重な実物資料である。長持ちに収蔵されていた衣裳には「直大公御夫妻鹿鳴館時代御洋服」と記されていた。

御洋服目録



直大公

1. 仮装舞踏服と付属品 (髷、三角帽)

栄子夫人

1. 小袖地夜会服 (白綸子地紗綾形唐团扇花束模様小袖夜会服)
2. 仮装舞踏服 (サテン地薔薇刺繍アップリケ散らし夜会服)
3. 仮装舞踏服 (プロケード地金モール刺繍アップリケ夜会服)
4. 大礼服用トレーン、ヘッド・ドレス

表 1 鍋島家の服飾遺品調査一覧 (昭和 54 年から 60 年)

	服種	御洋服目録	上衣		下衣		ネーム入付属	会符	着装写真・新聞・図録	着用年代	様式
			胸囲	肩囲	胸囲	肩囲					
直大公	1	アビ・ア・ラ・フランセーズ (上衣、ヴェスト、キュロット)					ボタン 尾錠		写真 裏面 記録	明治 20 年 4 月 20 日	ルイ 15 世末期 アビ・ア・ラ・ フランセーズ、 ボロネーズ
	2	髷、三角帽								鹿鳴館時代	バタスル・ドレス
栄子夫人	1	縞子地薔薇刺繍アップリケ散らし夜会服	82	57.5	62	60				明治 20 年代	大礼服
	2	白綸子地紗綾形唐团扇花束模様小袖夜会服	88	56	60	75	インサイドベルト ホック	ファンシー ボール		明治 20 年代以降	S カーブ・ライン
	3	ローズ色プロケード地金モール刺繍夜会服	84	72			インサイドベルト ホック		写真	明治 20 年代以降	S カーブ・ライン
	4	大礼服用トレーン					汗取り		写真 図録		
	5	篤志看護婦人会 制服	104	84	75		U.S.A				
	6	篤志看護婦人会 制服									
	7	篤志看護婦人会 看護帽									
	8	横紋用婦人乗馬服	84	69	71						
	9	乗馬用ジャケット (シングル) (ダブル)									
	10	ディ・ドレス	82	74	70		汗取り	明治 37.8 年 着用	新聞	明治 37 年 10 月 22 日	S カーブ・ライン
	11	帽子									

5. 篤志看護婦人会制服 2着
6. 篤志看護婦人会 看護服、看護帽
7. 横鞍乗り婦人乗馬服(上衣・スカート・ズボン)
8. 乗馬用ジャケット 2着
9. デイ・ドレス (ツーピース)
10. 帽子

表1の一覧は、衣裳の寸法、製作に関するタグ・ネーム入り付属、会符・当時の着装写真・新聞・雑誌の裏づけ資料、着用年代、ドレスの様式などをまとめたものである。

栄子夫人が鹿鳴館時代に着用した夜会服の胴囲寸法(60 cm、62 cm)と明治20年代の夜会服の胴囲寸法(72 cm)を比較すると8から10 cmほど大きく差があることがわかる。ドレスの様式を見ると、西欧の1880年代から1900年代のバスル・スタイルとSカーブラインのスタイルになる。素材やネーム入りの付属は舶来ものを使用している。

3. 薄緑色プロケード地ビーズ刺繍アップリケ 夜会服

本稿のドレスは上衣と下衣2部形式で、スカートの内側の紐によって後腰をふくらませ、脇から後にかけて布が流れるようなシルエットでバスル・スタイルの様式が残されている(図1、2)。

素材について(表2、図3~5)

ドレスの表地は薄黄緑色プロケード、クリーム色サテン、レース広幅・狭い幅、ビーズ・コード刺繍(図3)などを使用している。3種類の異なる素材は色のトーンでまとめており、ビーズ・コード刺繍は素材に接ぎに配置されセパレーション効果とドレスのアクセントとなっている。

プロケード地の紋様は、花と果実からなる2つのパターンの繰り返しになっており、果実の向きから方向性のあるパターンであることが分かる(図4-1、4-2)。また、布幅はスカートのパターンから約58 cmであると類推することができる。レース生地は斜め格子の直線と曲線の花模様の総柄からなり、花のボーダー柄で変化をつけている(図5-1、5-2)。上衣胸元から衿・後ろ袖に使用しているレースは花のボーダー柄とチュールネット部分からなり、広幅と同パターンの狭い幅のレースであることが分かり、2種類のレースを使用している。調査観察から、レースは裏面を使用していることが分かった。

構成・意匠について(図6~16)

夜会服の上衣身頃と袖は薄黄緑色プロケード地、胸元はクリーム色サテン地にレースを重ね、胸元から衿・後ろ袖つけおよび袖口にレースを使用している。身頃は10枚構成で、後ろ身頃は8枚のパターンからなっている。袖は外袖・内袖からなる2枚袖であり、外袖には細かな接ぎがあった(図6)。後ろ身頃の柄合わせはプロケード地の花柄を効果的に配置している(図8-2)。装飾のレースは前中心の打ち合わせ部分はタックをたたみ、胸元からネックラインを縁取り袖付けに向かってギャザーを寄せて華やかさを表出している(図9)。また、ビーズ・コード刺繍のアップリケを施し、柔らかな色調に変化を与えている。背幅より胸幅の方が広く胸を張り背筋をのばした姿勢が表出されている。身頃は綾織布で裏打ちをしており、シルエット形成には切り替えやダーツの縫い代を割り、ウエストのカーブの箇所には切り込みを入れ、その裁ち目は丸みをつけて落ちつかせ、かがり縫いをしている。縫い目にはボーン(鯨ひげ)をすえ、手縫いで縫い代にとめてある。身頃のシルエットは縫い目の13本と前端2本の15本のボーンによって形成されている。裾の見返しはバイアス布を使用し、パイピング装飾のための紐を裾に入れてとめている。身頃脇のパーツのみは裏打ちをしないプロケード地を使用していた(図10-1、10-2)。また、ウエスト部分のインサイドベルトは胴部3ヶ所にとめてある。この技法は他の遺品と同様で、西欧の1875年から1880年代のバスル・ドレスの縫い方と同一である。コルセットを使用して作られたシルエットから現代とは異なる身体と姿勢や着装スタイルとパターンの関係を見ることができる。また、袖つけはミシン縫いをし、縫い代は裁ち目がかりをしている。裏面には袖つけ脇の下部分に汗とりが取り付けられている(図10-1)。表1の鹿鳴館時代のバスル・ドレスには使用されていなかったが、明治37、8年のデイ・ドレスには同一の汗取りが見られ、Sカーブラインのドレスに多く見られることが分かった。

スカートの構成は6枚からなり(図7)、前面はクリーム色サテン3枚からなり、裾には共布を使用したフリルの装飾がつけられている(図12-1、14)。上に同色のレース生地を重ねている。サテン地のウエスト分には細かい接ぎと汚れの筋が見られたが、レースの重なりで目立たない状態であった(図12-2)。後ろスカートは薄黄緑色プロケード3枚からなり、トレーンを曳いたシルエットである。

表 2 素材

	上衣	下衣
表布	薄黄緑色ブローケード、 クリーム色サテン、 レース広幅・狭い幅、	薄黄緑色ブローケード、 クリーム色サテン、 レース広幅
裏打ち布	白綾織	なし
裏布	なし	白サテン、寒冷紗
装飾	ビーズ・コード刺繍	ビーズ・コード刺繍
付属	ボーン、ボーンテープ フック・アンド・アイ インサイドベルト ドレスシールド コード (パイピング)	フック 紐 綿



図 2 夜会服 前面・後面



図 3 ビーズ・コード刺繍



図 4-1 ブリケードの地紋



図 4-2 ブリケード地紋のパターン



図 5-1 レーススカート裾部分 (裏)



図 5-2 レースの柄 (表)

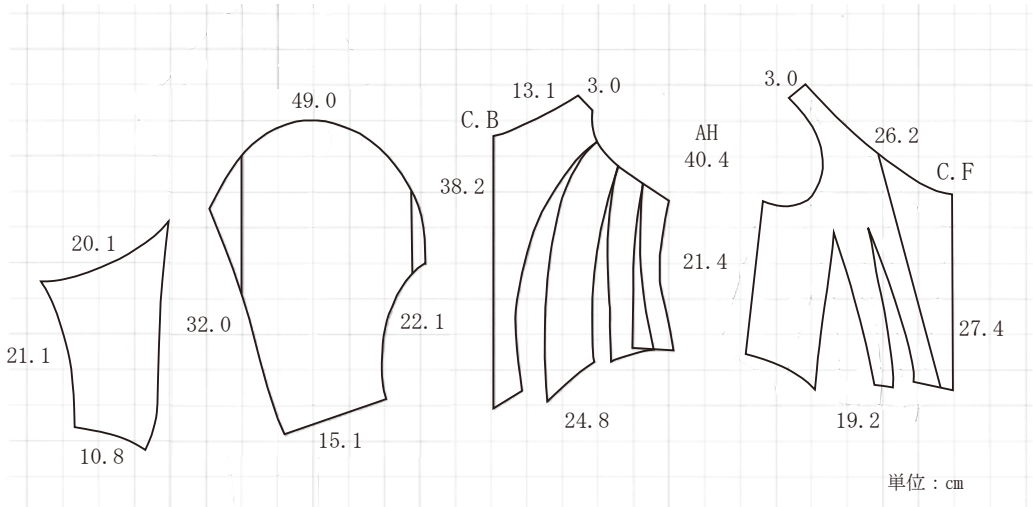


図 6 夜会服 上衣パターン 1マス5cm



図 7 夜会服 下衣パターン 1マス5cm

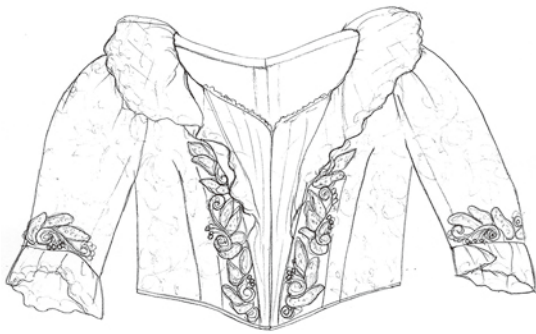


図 8-1 夜会服 上衣前面



図 8-2 上衣後面



図 9 レース上衣胸元から肩、袖つけ部分

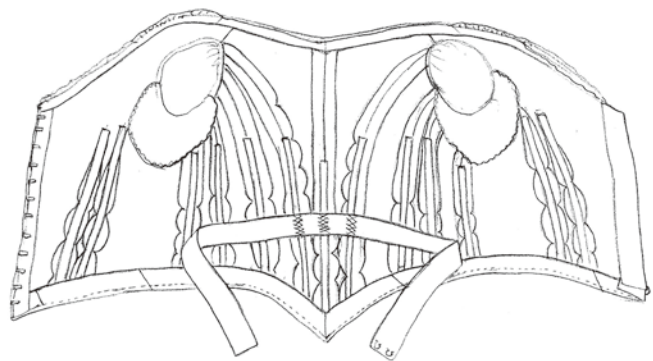


図 10-1 上衣裏面

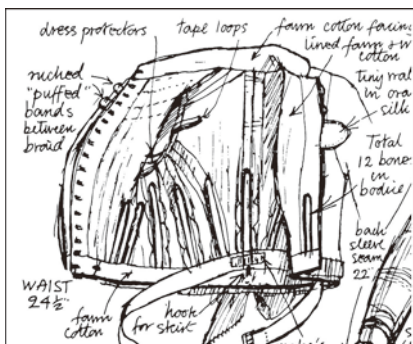


図 11 COSTUME IN DETAIL p. 259 1890 年
上衣の内部構造

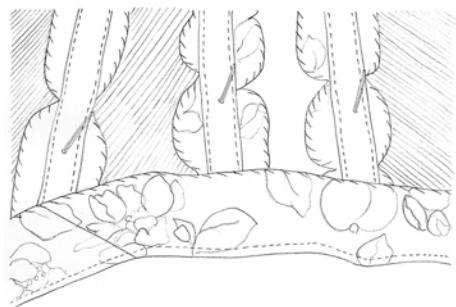


図 10-2 裏面裏打ち・裾見返し



図 12-1 下衣 スカート表
ブロード地後ろ中心のスカート裾に細かな接ぎが見られる



図 12-2 右脇の接ぎを利用したポケット口



図 13 開き部分のホック
NICHOLLS のネーム入り



図 14 下衣前面裾のフリル飾り・レース

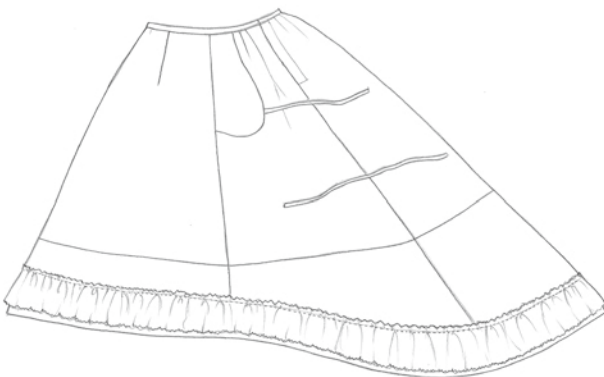


図 15 下衣 スカート裏面
脇接ぎ部分にポケット、バツルを形成するための紐 2 本、
裾のひだ飾り・ピンキングを使用したダスト・ラッフル

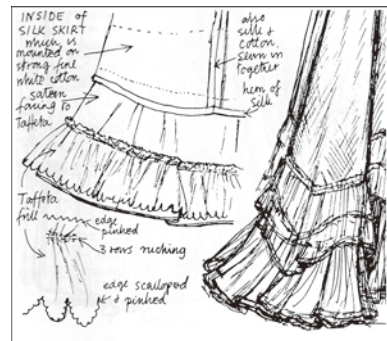


図 16 COSTUME IN DETAIL p. 262 1890 年
スカート裾内部

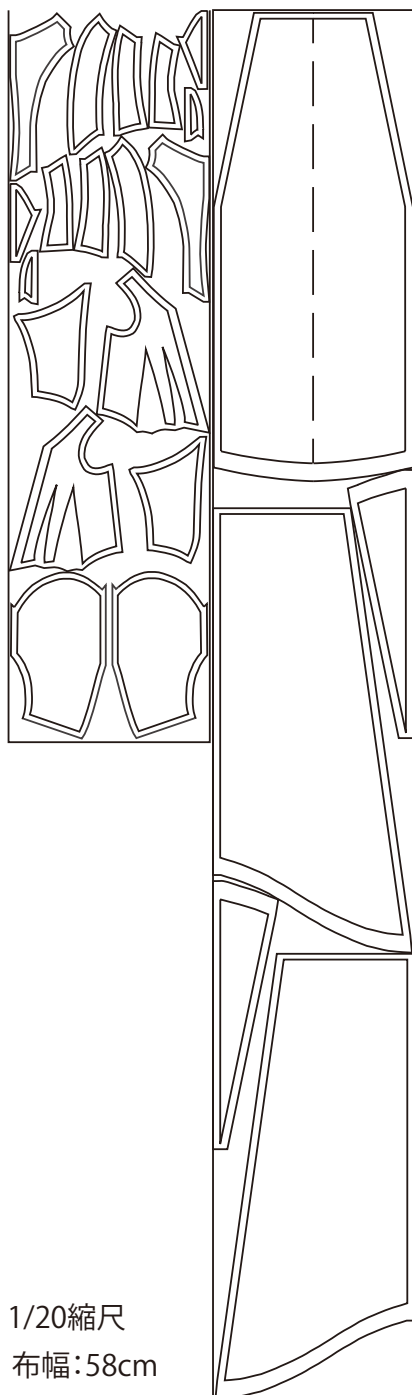


図 17 プロケード地 身頃・袖・後ろスカート裁断図

後ろ裾には薄く綿を入れシルエットを整えている。表 1 の小袖ドレスの上衣前身頃袖つけ部分にも綿を入れてシルエットを整える手法が使用されている。スカートの後ろ中心は輪を使用しており、布の制約から裾部分に細かな接ぎが見られる。開きは縫い目を利用して右側後ろ（プリンセスライン）にある。開き部分にはネーム入りのフックがつけられている。また、右脇接ぎの位置にポケット口があり、その奥にポケットがついている（図 12-2、図 13）。装飾のビーズ・コード刺繍は、脇の接ぎ部分に配置され側面のデザインに変化を与えている。裏面にはバスルを形成するための紐が 2 本つけられ、シルエットを調節している。裾には塵よけと装飾を兼ねたダスト・ラッフルがついている（図 15）。

シルエットやディテールの構成および縫製は、Nancy Bradfield 著「COSTUME IN DETAIL (1730-1930)」に類似していることが分かる（図 11、16）。

プロケード地の裁断（図 17）

プロケード地の布幅は、スカート後ろ中心のパーツと上衣の外袖に接ぎから、約 58 cm と想定して裁断図を考察した。

前述のように、柄には方向性があり、スカート裾の細かい接ぎの部分は逆方向に裁断していることが分かる（図 12-1）。また、外袖はひと丈に配置すると布幅に納まるのが分かる。つまり、袖に細かい接ぎがない場合は倍の丈の布が必要となる。後ろ身頃は 8 枚のパターンからなっているが、同じ様式の上衣は 6 枚からなるものが多い。なぜパーツが多いのか疑問であった。柄合わせを見ると花模様のつながりを配慮しながら布を無駄なく裁断できる配置になることが分かった（図 8-2）。

以上のように、布幅に合わせて細かい接ぎを入れ合理的なパターンの配置をしている。一方で、後ろ身頃の柄合せなど様々な工夫が見られる。

ドレスの製作年について（図 18）

ドレスの製作年について、表 1 のプロケード地アップリケ夜会服の寸法・構成・縫製法並び様式について、比較検討を行った。

ドレスはファンシーボールの会符がつけられているが、着装写真などは残されていない。ウエストベルトに E. Joyce & Co. court Dress Maker 16 Dover St. London の織ネームがあり、明治 20 年代に着用されたものである。ドレスは上衣と下衣の 2 部形式で胴囲寸法は 72 cm である。スカートの内側の紐によって後腰をふくらませ、脇から後にかけて布が流れるようなシルエットでバスル・スタイルの様式

である。本稿のドレスと胴囲寸法および様式が類似していることが分かる。また、上衣は背幅より前幅を広くとる構造で、同様の縫製法で仕立てられている。



図18 夜会服の比較

上段 仮装舞踏服(ファンシーボール)明治20年代
下段 本稿の夜会服

る。異なる点はスカートの後腰の分量が少ないことである。

明治20年代後半から30年代にかけては、西欧の19世紀末20世紀初頭にあたり、アール・ヌーボー様式になる。つまり、スカートは後ろ腰のボリュームを抑えたシルエットになり、Sカーブラインに移行していく様子がうかがえる。したがって、ドレスは明治20年代後半から30年代にかけて製作されたものと推定ができる。

ドレスの着装について(図19)

ドレスの修復では、スカートのウエスト脇から後ろ部分の布の欠損があり、マネキンに着装できる状態ではなかった。布が欠損した原因として、トレーンの着装に伴う負荷によるものではないかと仮説を立てた。表1の遺品に大礼服用トレーンがあり、金具フックと紐によりドレスの後ろ腰に固定するようになっている。金具フックは3ヶ所につけられており、それと組になるフック・アンド・アイの付いているローブ・デコルテは存在していない。トレーンはドレスと同地質のものや白の紋織り・ピロードなどが用いられ、色目はドレスと同色の場合や異色を用いることもあった。トレーンを着装した際にベルト布に負荷がかかることが想像できる。ベルト布の欠損部分とフックの位置が符合するのではないかと思います。裏づけとなる着装写真の調査を行う中で1冊の本と出合った。そこには、ローブ・デコルテに大礼服用トレーンとヘッド・ドレスを着装した栄子夫人の写真があった。(図20)写真には副總裁侯爵夫人鍋島栄子肖像とあり、明治35年2月5日に大日本女学会が発行した「女学講義」第4回前期第4巻

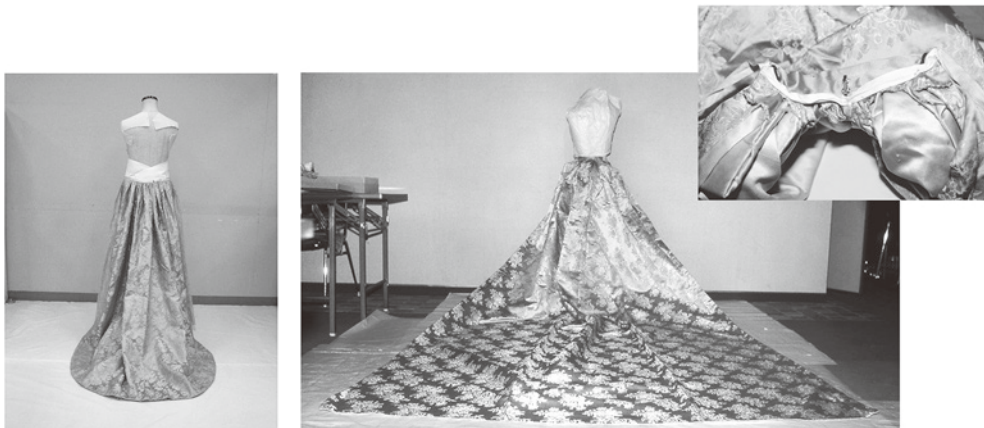


図19 ドレスの着装
本稿の夜会服とトレーン



図 20 副総裁侯爵夫人鍋島栄子肖像
ローブデコルテ・トレーン・ヘッドドレス
明治 35 年「女学講義」

であった。残念ながら、本調査のドレスとは異なるものであった。

栄子夫人の社会活動

次に明治 20 年から 30 年代の栄子夫人の社会活動

について、その様子を当時の雑誌などから見てみる。明治 20 年、上流婦人で構成される日本赤十字篤志看護婦人会が結成され、栄子夫人は明治 34 年から昭和 10 年まで会長を就任した。

「婦人画報」明治 38 年 10 月 15 日に、次のような内容の記載がある。

家庭の女王 鍋島侯爵夫人栄子

「夫人は現に愛國婦人會理事、篤志看護婦人會の幹事長となり、大日本婦人衛生會、育兒會等の會の會長に任じ、其他婦人の企てる各種の團體に於て、常に統率者となり、周旋者となり、出資者となつて、十年廿年一日の如く盡瘁せらるゝ事は、世人の最も記憶すべく、敬服すべき事である。既に大貴族の夫人としては、此等一般の社會的事業の上に、常に上に對つて忠誠なる務めに服し、上流の交際を怠らず、外人との往來などに繁忙を極めて居られる。侯爵が曾て、公使たり、式部長たりし經歷上から、外國人との交際は今日に到る迄で絶えぬ。従つて、栄子夫人が交際社會の先導者たるの位置は依然として舊の如しである。一中略—

夫人は亦生田流の箏を能くせられ、以前は長唄も弾かれた別荘などでは義太夫を聞いて樂まれる。又西洋音樂にも通じて居られる。夫人は又自ら親しく髪を結ばれて、従つて、多くの令嬢等は皆髪を結ふのに人手を借りない、梨本宮妃となられた伊都子殿下の如き、丸髷まで獨りで、結はるゝとの事である。裁縫の道までも夫人は一通り心得て居られ、令



図 21 大日本女学会第一回講修終了式 鍋島邸に於いて 10 月 17 日
前列右から、侯爵令嬢 鍋島伊都子、侯爵夫人 鍋島栄子、6 人目 侯爵令嬢 鍋島茂子、
小松宮頼子殿下、侯爵令嬢 鍋島信子、4 列目右から 6 人目 侯爵 鍋島直大
明治 30 年「女学講義」

嬢等は速くから、自身の服装を始末する事に仕込んで置かれるとの事である。」

婦人画報には、鍋島家に関する記事がいくつも見受けられた。上流階級・中流階級および庶民にまで情報が広く行き渡り、洋装への関心も深まっていったことが分かる。

明治28年、大日本女學會設立し栄子夫人は副総裁を務めている。調査の中で見つけた「女学講義」と大日本女學會が繋がり、通信の女子教育に労を尽くしていたことが分かった。

明治28年11月発行、「女学講義」の大日本女學會設立趣意より一部を抜粋する。

「女子の教育は家庭の教育の本源として、國家に欠くべからざるはいふまでもなし。一中略— 女子教育上の最も大なる困難は、女子は大抵家事上の都合によりて、其家を離れ難き事情あるとなり。一中略— 通信講義の法によりて、教育の普及を圖らば、其効果は、大都に高等女學校を點置するよりも一層大なるものあらんと。講義録の如何なる僻陋にも到り得べき便宜と、家門を離れずして修學し得べき利益とは、優に女子教育の困難に打克ちて餘あるべし。依りて茲に朝野貴婦人の贊助を仰ぎて、本會を設立することゝはなりぬ。學科の程度は、成るべく實用を主として平易に縷述し、務めて輕佻の風を避け、専ら貞淑の徳を養ひ、一般婦人の知徳を増進して、我國女子の品位を高むるを目的とせんとす。」とある。「女学講義」の内容は、學科として修身、日本地理、日本歴史、國文、漢文、作文、生理及衛生、禮法、家事綱要、割烹、裁縫、圖書、習字、附録として史傳、御伽譚、詞藻、雜報から構成されている。2年後の明治30年10月18日に第1回の講修終了式が鍋島邸で行われた(図21)。明治35年には、会員が1329名であった。

以上のように、栄子夫人は社会的事業や外国との交流に務め、日本や西洋の芸術にも関心を持たれていたことが分かる。また、大日本女學會創立時から副総裁を務められ、近代女子教育において重要な役割を担い、自らも服装の身支度や髪を結い裁縫まで一通り心得ておられていたことが分かった。

4. まとめ

鍋島栄子夫人着用の夜会服の修復に関わる調査を契機に、明治20年代から30年代の様相が明らかになった。ドレスの素材や付属品は他の服飾遺品と同様に、舶来品を用いており、パッスル・スタイルの

シルエットを形成するため、その構造と縫製がなされていた。

また、修復作業を行うための調査観察から、様々な発見があった。

- ・レース生地はすべて裏側を使用していた。
- ・スカート後ろ中心のパーツと外袖には、接ぎがある。
- ・スカート前面のサテン地には、ウエスト部分に細かい接ぎと汚れ(筋)がある。
- ・スカートの裾の裂けた部分から内側を観察することができ、硬い芯が使用されていた。後ろの裾には綿が入っていた。

後ろスカートと外袖の接ぎについては、プロケード生地の布幅を58cmと想定した裁断図から、その意味を考察した結果、布幅に合わせて細かい接ぎを入れ合理的なパターンの配置をしている一方で、後ろ身頃の柄合せなど様々な工夫が見られた。また、前スカートサテン部分の接ぎは、布の再利用による製作の可能性を示唆している。レース生地の裏表の判断、スカートの後ろ裾に綿を入れる技法から、明治期の婦人服の縫製法や状況を鑑みることができた。

ドレスの製作年については、明治20年代に着用されたプロケード地アップリケ夜会服の寸法・構成・縫製法並び様式の比較検討を行った。胴囲寸法および様式が類似していることが分かった。異なる点はスカートの後腰のボリュームが少ないことで、Sカーブラインのシルエットに移行していく様子が見えてくる。したがって、ドレスは明治20年代後半から30年代にかけて製作されたものと推定ができる。

更に、ドレスの欠損の原因について、トレーン着装に伴う負荷によるものではないかと仮説を立て裏づけ資料の調査を行った結果、栄子夫人の着装写真が掲載されていた女学講義を発見し、大日本女学会に辿りついた。創立時から副総裁を勤められ、近代女子教育において重要な役割を担っていたことが分かった。

謝辞

本研究を行うにあたり、復元・修復研究のご指導を賜りました、大妻女子大学名誉教授・石井とめ子先生に御礼申し上げます。また、衣裳の調査研究の機会をいただきました鍋島報効会副館長の藤口悦子氏・学芸員の富田紘次氏に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 鍋島家の服飾遺品（第一報）―鍋島直大とその夫人―，石井とめ子・大網美代子・藤巻知寿子，大妻女子大学紀要―家政系―，No. 28 p. 1-20, 1992
- 2) 鍋島家の服飾遺品（第二報）―夜会服・仮装舞踏服―，石井とめ子・大網美代子・藤井朱美，大妻女子大学紀要―家政系―，No. 29 p. 1-21, 1993
- 3) 鍋島家の服飾遺品（第三報）―夜会服・大礼服用ヘッドドレス・トレーン・帽子―，石井とめ子・大網美代子，大妻女子大学紀要―家政系―，No. 30 p. 1-14, 1994
- 4) 鍋島家の服飾遺品（第四報）―篤志看護婦人会制服・看護服―，石井とめ子・大網美代子，大妻女子大学紀要―家政系―，No. 31 p. 1-18, 1995
- 5) 鍋島家の服飾遺品（第五報）―横鞍乗り婦人乗馬服―，石井とめ子・大網美代子，大妻女子大学紀要―家政系―，No. 32 p. 221-238, 1996
- 6) 鍋島家の服飾遺品（第六報）―ディ・ドレス―石井とめ子・岡田路子・藤井朱美，大妻女子大学紀要―家政系―，No. 33 p. 121-133, 1997
- 7) 鍋島家の服飾遺品（第七報）―シングルジャケット・ダブルジャケット―石井とめ子・大網美代子，大妻女子大学紀要―家政系―，No. 1.34 p. 59-68, 1998
- 8) 白綾子地紗綾形唐団扇花束模様小袖夜会服（その1）―一意匠性を中心に―，大網美代子・石井とめ子，日本服飾学会，Vol. 11 p. 38-43, 1992
- 9) 白綾子地紗綾形唐団扇花束模様小袖夜会服（その2）―一意匠性を中心に―，石井とめ子・大網美代子，日本服飾学会，Vol. 11 p. 44-51, 1992
- 10) COSTUME IN DETAIL 1730-1930, Nancy Bradfield George G. Harrap & Co. Ltd. 1968
・上衣構成内部 1885-87, p. 253
・袖の部分・後ろスカート裏面 1889-90, p. 255
・スカート開き部分 1890, p. 257
・上衣の構成内部 1890, p. 258
・スカート内部・裾 1890, p. 259
- 11) 女学講義第4回前期第4巻，大日本女學會，明治35年2月5日
- 12) 女学講義，大日本女學會，明治28年
- 13) 女学講義，大日本女學會，明治30年
- 14) 婦人画報，明治38年10月15日